

国立国語研究所学術情報リポジトリ

小説における補文標識「の」「こと」の使い分けについて：語り手の心的態度の観点から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): no, koto, the process of conceptualization, narrator's mental attitude, psychological commitment 作成者: 尾野, 治彦, ONO, Haruhiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002121

小説における補文標識「の」「こと」の使い分けについて —語り手の心的態度の観点から—

尾 野 治 彦

(北海道武蔵女子短期大学)

キーワード

「の」、「こと」、概念化のプロセス、語り手の心的態度、心理的関与

要 旨

久野(1973)以来、補文標識としての、「の」「こと」についての研究は、主にコンテキストが考慮されない文を対象にして、「の」「こと」がそれぞれ何を表すのかということについて論じられ、実際のコンテキストにおいて、「の」「こと」どちらも可能な場合における使い分けの要因についての考察はあまりなされてこなかったように思われる。

本稿では、この問題に対して、認識論的・語用論的観点から考察を試み、「の」「こと」の使い分けには、語り手の心的態度が関与しており、認識対象に心的態度が関与しているときは「こと」が用いられ、そうでないときは、「の」が用いられることを小説の用例を基に論じた。また、いくつかの「こと」の用法(強調構文の主節に表れる「こと」、「の」感嘆文と「こと」感嘆文、命令を表す「のだ」と「ことだ」等)についても論じ、これらの「こと」の用法は心的態度の表れとして捉えることが可能であり、補文標識「こと」との関連性が示された。

0. はじめに

補文標識「の」「こと」の使い分けについての研究は、先駆的な久野(1973)を皮切りに橋本(2001)に至るまでその蓄積はおびただしいものがあるといえる。主だったものだけでも、井上(1976)、Josephs(1976)、影山(1977)、N.McCawley(1978)、牧野(1980, 1996)、坪本(1984)、工藤(1985)、山本(1987)、橋本(1990, 1994)、佐治(1993)、野田(1995a)、大島(1996)、近藤(1997)、益岡(1997)、鎌田(1998)等があり、紀要論文まで入れれば枚挙にいとまがないほどである。しかし、この問題に関して、まだもって一致した見解には至っていないという現状は、逆に、「の」「こと」の使い分けについての新たな見地からの解明の余地がありうることを示しているようにも思われる。

「の」「こと」についての従来の研究は、初期の久野(1973)、Josephs(1976)、N.McCawley(1978)におけるように、「の」「こと」どちらか一方しか用いられない例を中心にして、この使い分けの要因を、主に補文命題の意味内容の違いから説明しようとする考察が多かったように思われる。しかし、このような分析の問題点は、どちらか一方しか用いられない場合についての「の」「こと」の使い分けについては有効なのであるが、どちらも容認可能な場合における「の」

「こと」の使用については、どのような場合に「の」が用いられ、どのような場合に「こと」が用いられるのかについては、十分な説明ができないということである。これは、久野に代表される従来の研究が主にコンテキストから取り出された文を対象にしてきたためであり、もし、「の」「こと」の使い分けの要因がコンテキストの中にあるとするならば、コンテキスト不在の研究が、この使い分けの要因を明らかにすることができなかったのは当然であったということになる。

本稿の目的は、従来の補文標識「の」「こと」についての分析の問題点を指摘し、主に小説における認識動詞と共に用いられる用例を通して、「の」「こと」の使い分けには、語り手の心的態度が関わっていることを示し、認識論的・語用論的観点から、「の」「こと」の用法を見直してみることにある。

1. 久野(1973), Josephs(1976)の問題点

久野(1973: 137-142)にはじまる「の」「こと」についての研究は、まず、「の」「こと」がそれぞれ、何を表しているかということについてであったが、この問いに対し、久野は、「の」と「こと」の違いは、前者が「具体的動作、状態、出来事」、後者が「抽象化された概念」を表すことにあるとした。

例えば、次の文をみてみよう。

- (1) 私は太郎が花子をぶつ {の/*こと} を見た。
- (2) 太郎が10才である {*/の/こと} は確かです。
- (3) 太郎はコロンバスがアメリカを発見した {の/こと} を知らなかった。

久野によれば、(1)(2)の補文命題は、それぞれ、具体的な動作、抽象化された概念を表すので、「の」、「こと」をとるということになるが、ここで注意しておかなければならないのは、久野は、「具体」「抽象」の概念は、「の」「こと」の補文標識のみならず、それらと共に生じる補文の命題内容についても当てはまることを暗黙の了解事項としているということである。

確かに(1)(2)については、補文命題である「太郎が花子をぶつ」「太郎は10才である」が、それぞれ、「具体的」「抽象的」な意味内容を表していることははっきりしており、そのため、それぞれの命題が、「の」「こと」をとるとすることには一見何ら問題がないように思える。しかし、(3)のような「の」も「こと」もどちらもとれる場合はどうであろうか。実際、この場合について久野は、「コロンバスはアメリカを発見した」は、「具体的な出来事」と「抽象化された概念」の両方を表しうるので、「の」「こと」の両方をとりうるとしている。しかし、「コロンバスがアメリカを発見した」に、「の」「こと」の使い分けを引き起こすほどの具体的と抽象的な意味内容の差を求めることはたして可能であろうか¹。

例えば、次の例をみてみよう。

- (4) (木谷は)お篠を連れて、北陸から京都へと遊び回ったのを、思い出した。
(松本清張『告訴せず』: 175)
- (5) 元子は銀行にいたころの暑中休暇に北海道にひとり旅していたことを思い出した。
(松本清張『黒革の手帖 (下)』: 237-238)

久野の考え方によれば、これらの例の「の」「こと」の選択の要因については、(4)においては、「北陸から京都へと遊び回った」のは具体的な意味内容を表しているので「の」が用いられ、(5)の「銀行にいたころの暑中休暇に北海道にひとり旅していた」のは抽象的な意味内容を表すので「こと」が用いられているということになる。しかし、このような考え方はきわめて不自然であるとすべきであり、むしろ逆に、(4)の補文命題が具体的な意味内容を表しているとするれば、それは「の」と共に用いられているからであり、(5)が抽象的な意味内容を表しているとするれば、それは「こと」と共に用いられているからであると考えべきであろう。そうすると、ではなぜ、そもそも、(4)では「の」が用いられ、(5)では「こと」が用いられているのかという疑問が生じることになるが、この根本的な問いに対しては、久野説では答えることができないということになる。

次に、Josephs(1976：341)の例をみとめることにしよう。

(6) 彼女は、その口ぶりから、計画がうまくいっていない {の/こと} が分った/を知った²。

Josephs は、「の」が用いられるときは、主語である彼女は、相手の口調や話し方など観察できるものによって、つまり、「直接的」に、補文命題の内容を知り得た場合を表すのに対し、「こと」が用いられるときは、主語である彼女は、相手の発言を分析、考察した結果として、つまり、「間接的」に、補文命題の内容を知り得た場合を表すとした。この「直接的」・「間接的」の概念は、(6)のような場合の使い分けについては、一見、有効であるようにも思える。

しかし、次の例を見てみよう。

(7) その短い言葉を聞いただけでも、彼が日本語に習熟しているのがわかった。

(松本清張『聖獣配列 (上)』：33)

(8) お世辞でないことはその眼の色でわかった。

(『告訴せず』：308)

(7)(8)については、「直接的」「間接的」の概念から、「の」「こと」の使い分けを説明することには無理がある。なぜなら、認識の対象となる事態は、どちらも「言葉を聞く」「眼の色」という、聴覚・視覚という知覚による直接観察によって知り得たものであるといえるからである。

また、この Josephs の分析は、先の(4)(5)にも当てはまらないことも明らかである。そもそも、「想い出す」プロセスに、直接、間接の区別があるようには思えない。一方、久野の分析も、(7)(8)には当てはまらないといえる。「日本語に習熟している」が具体的な内容であるため「の」が用いられ、「お世辞でない」が抽象的な内容であるため「こと」が用いられたとする分析は、ほとんど説得力を持たないであろう。

井上(1976：263)も、次の(9)(10)における「の」「こと」の使い分けについて、「直接・間接、あるいは抽象的・具体的な差があるだろうか」と、久野、Josephs による「の」「こと」の捉え方に疑問を呈している³。

(9) 誰かが部屋に入ってきた {こと/の} に気づいた。

(10) 彼らは幸福が訪れる {こと/の} を期待した。

2. N. McCawley(1978)の問題点

次に、「真実性(truth)」の観点から、「の」「こと」の使い分けを説明しようとしたN. McCawley(1978)を取り上げる。

次の例をみてみよう。

(11) お父さんがお前のことをこんなに心配してやっている {の/? こと} がまだお前にはわからんのか?!

(12) 皆さんがたがお前のことをあんなに心配してくださっている {の/こと} がまだお前にはわからんのか?!

(N. McCawley 1978: 189-190)

N. McCawley によれば、(11)では、「お父さんがお前のことをこんなに心配してやっている」ことは、話し手である父親が自分の心理状態について述べたものであるため、その命題が真であることは明らかであり、よって「の」が用いられるが、(12)では、話し手が他人の心理状態について述べたものであるため、その補文命題の真実性は(11)のように保証されてはおらず、「こと」のほうがより自然になるとした。

次の例についても同様の説明をしている。

(13) おにいちゃんから外人には日本語がとてもむずかしい {こと/*の} を 聞いて/聞かされて 驚いた。本当かしら?

(14) あなたがた西洋人にとって日本語がむずかしい {の/??こと} は当たり前の話です。

(N. McCawley 1978: 190)

ここにおいても、(13)で「の」が用いられないのは、「外人には日本語がとてもむずかしい」という命題が話者の中で知識として十分に消化されていない、つまり、命題の真が確定していないからであり、(14)で「の」が自然であるのは、命題の真であることが確定しているためであるとしている。

しかし、この考え方では、次のような例における「こと」の用法を説明することができない。

(15) どうして、ここに自分がいることがわかったか。木谷は考えた。(『告訴せず』: 367)

(16) 「なにしろ、そのときは無我夢中でしたから、なにもおぼえておりません。私より前に、幸子さんは誰かに殺されていたことは間違いありません」

(松本清張『夜光の階段(下)』: 205)

(15)の「こと」での事態は、真であることが明白な事柄である。また、(16)は、殺人犯の汚名をきせられた容疑者が必死に弁明する場面であるが、この場合、自分が犯人でないことは自分が一番よく知っているのであり、もし、N. McCawleyの主張するように、「の」が「こと」より確固とした「真実性」を表すのであれば、「の」を使うはずであるということになる。

さらに、先の(4)(5)の例についても、(4)の「の」が用いられている例が、(5)の「こと」が用いられている例に比べ、「想い出す」内容の真実性の度合いが高いといったことは考えられず、「の」と「こと」の使い分けが、補文命題の真実性の違いにあるとすることはできない。

結局、(1)(2)のような「の」「こと」どちらか一方しか生じない例においては、「見る」という動詞の性質や、「太郎は10才である」といった補文命題の性質で、「の」「こと」の使い分けを説

明できたかもしれないが、「の」「こと」もどちらも用いられる場合の「の」「こと」の使い分けについては、述語のタイプや補文命題の性質だけでは、説明できないということになる。ということは、(1)(2)におけるように「の」「こと」の使い分けが、補文命題の「具体」や「抽象」で説明できる場合であっても、この分析は十分なものではないということになる。なぜなら、求められる仮説は、「の」「こと」どちらか一方しか用いられない場合だけでなく、「の」「こと」どちらも使用可能な場合の使い分けについても、有効なものでなければならないからである。

この使い分けの問題については、「コンテキスト」における「話し手（語り手）」の補文命題に対する心理的な関わり方というアイデアが必要となってくるのであるが、次に、「の」と「こと」の使い分けの問題に、この「話し手」の概念を、初めて取り入れたと思われる山本(1987)を検討してみる。

3. 山本(1987)における「話し手」の概念

山本(1987)は、「の」「こと」の違いを、知覚作用、認識作用が誰に属するのかという、従来の研究にはなかった「認識の主体」という認識的アプローチを導入した点で、従来の研究とは一線を画し高く評価されるものである。山本(1987:84)は、次の例における「の」「こと」の使い分けを問題にした。

(17) 私は花子が浴場へ降りていったのを知っている。彼女と廊下ですれちがったからである。

(18) 私は花子が浴場へ降りていったことを知っている。宿屋の番頭さんからそう聞いたからである⁴。

山本は、(17)については、認識の主体である「私」が「廊下ですれ違う」ことによって直接的に得た知識であるが、(18)については、第三者的な立場から眺められる「話し手」の「概念化のプロセス」を経たものであるとした。つまり、「の」と「こと」の違いは、「認識」が直接「認識主体」に属するものなのか、あるいは一度「話し手」の認識という「網の目」をくぐっているかどうかによるものとし、「補文標識『こと』は、『話し手』の認識を基準にしたマーカーなのである(山本1987:86)」とした。

この捉え方は、「こと」の本質を「抽象的」とした久野(1973)、「間接的」とした Josephs (1976)の特徴づけよりも、はるかに「こと」の本質を捉えたものと思われる。すなわち、「の」と「こと」の違いは、「話者の概念化」を経たものかどうかにあるのであり、「こと」補文がもつ「抽象的」・「間接的」といった特徴は、「話し手の概念化のプロセス」を経たことから必然的に生じる特質と考えられる。久野や Josephs の分析が何らかの「の」「こと」についての一般化を捉えていたとされるのはこのためである。

「こと」については、その後、佐治(1993:9)の「事態を事柄としてまとめて体言化する」、あるいは、大島(1996:50)の「ある事象のあらましを導く」といった説がだされたが、これらの特徴づけも、山本のいう「概念化のプロセス」から帰結するものと考えられる。なぜなら、「まとめて体言化する」や「あらましを導く」といった機能も、「概念化のプロセス」という話者の心

的活動によるものと考えられるからである。また、小説の場合においては、山本のいう「話し手」は、「語り手」であることをつけ加えておく必要がある。

ちなみに、「の」については、佐治は「事態をそのまま、何の意味もつけ加えずに体言化する」、大島は「ある事象の全体をとらえる」としているが、この「の」の特徴づけは、「こと」とは違って、話者の「概念化のプロセス」を経ていないものと解することができよう。本稿においても、「の」については従来の説を継承し、「の」は「現場のコンテキストにおいて指示される事態そのものを表す」と捉えることにする⁵。この特徴が、久野の「具体的」、Josephs の「直接的」に通じるものであることは明らかである。なぜなら、現場の事態そのものは、具体的なものであり、かつ直接的なものだからである。

しかし、山本は、(17)(18)のような、「の」「こと」の使い分けが比較的是っきり説明できる場合は問題にしたが、次の(19)のような例については、「の」「こと」どちらも可能であるとし、「の」「こと」の両方が使用可能な場合の使い分けを引き起こす要因については、考察の対象とはしなかった。

(19) だが(恵美は)その藤川が自分を刺すような視線を放っている {の/こと} に気付き
……調理場へ駆け込んでしまった。

(井上ひさし『四捨五入殺人事件』, 山本1987: 85)

しかし、実際、(19)の原文においては「の」が用いられているように、「の」「こと」どちらも可能である場合であっても、実際のコンテキストにおいては、どちらかふさわしいほうが用いられているのであり、そこには、「の」「こと」のどちらかが選択される何らかの要因が存在しているように思われる。つまり、山本は、「話し手の認識マーカー」としての「こと」の本質は明らかにしたのであるが、どのような場合に、話し手の認識を経て「こと」でマークされ、どのような場合に、話し手の認識を経ない「の」でマークされるのかという問題、つまり使い分けを引き起こす「何らかの要因」については、山本においても考察の対象とはならなかったのである。

本稿は、この山本(1997)ではふれられることのなかった問題、すなわち、どのような場合に「概念化のプロセス」が生じて「こと」が用いられるのか、という問いに対して答えようとするものである。

4. 小説における「の」「こと」の使い分けについての考察

「の」「こと」の両方をとる動詞としては、「気づく」「知る」「思い出す」「分かる」といった認知動詞や、「恐れる」「驚く」「喜ぶ」といった態度動詞があげられるが⁶、これらをまとめて認識動詞ということにする。これらの動詞が、「の」「こと」どちらもとれることについては、認識対象が、認識主体によって、現場の事態での一次的・直接的な情報としても、「概念化のプロセス」を経たものとしても、捉えられるからであるということになる。以下、どのような場合に、「概念化」のプロセスを経て「こと」が用いられるのかを、物語を物語る語り手の心的態度という観点からみていくことにする。

4.1. 認識動詞の場合

まず、「気づく」において、「の」「こと」が用いられている(20)(21)の例を通して、その使い分けを引き起こしていると思われるコンテキストの違いについて考察してみよう。

(20) 「皆さまにお願い申し上げます。車内で持主不明の手荷物にお気づきでしたら、車掌にお知らせをお願いします。……」

……げんに車掌の警告のあと、乗客の何人かの眼がトランクに一瞥を送ったのに、木谷は気づいた。 (『告訴せず』: 10)

(21) 木谷は、あのモーターの出火が、その策略の遂行に欠かせない「事故」だったことに気づいた。なぜなら、二つの改印届をするのには、木谷自身を隔離する必要があったからである。 (『告訴せず』: 419)

まず、(20)の「の」については、現場の登場人物の「木谷」の視点を通して、コンテキストの現場での事態を語り手がそのまま語っているといった印象がある。一方、(21)の「こと」については、登場人物の認識行為に衝撃、もしくは心理的動揺が感じられるコンテキストであるといえる。さらにいえば、この心理的動揺は、登場人物の動揺のみならず、この事態を物語る語り手の声、心的態度となっても表れていることが感じられる。つまり、登場人物の認識行為を客観的・中立的に描写するはずの語り手が、ここでは、コンテキストの現場に介入し、いわば心的態度をもつ語り手として、自ら事態を語っているといったニュアンスが感じられる。

また、あえて、この場合、心理的動揺は、登場人物の「木谷」と「語り手」のどちらに由来するものであるかといえ、それは、この事態を物語る語り手のものであると考えられよう。このことについては、Banfield(1973: 25)の、“the grammar does not allow any speaker to ‘express’ another’s state, except by direct quote, but only to describe that state, because constructions expressive of a speaker’s state always belong to the unique speaker of the ‘expression’” とする、“the one expression/one speaker principle” の原理が働いていると考えられる。つまり、語り手が、登場人物の心的態度を語るとき、登場人物の心的態度は、語り手の心的態度となって表れてくるのである。

結局、(20)(21)での「の」「こと」の使い分けは、登場人物（語り手）が認識対象に対して、心理的反応を引き起こすような意味内容を見出しえたかどうかということになり、何らかの意味内容を見出した場合は、語り手は登場人物の視点でもって認識対象を中立的に描写することに収まりきれなくなり、「こと」の「概念化のプロセス」を通して、語り手自らの視点、つまり、心的態度を持つ語り手自らの声でもって語るようになるということができると考えられる。

もちろん、(20)(21)の「の」「こと」を入れ替えることも可能ではある。しかし、(20)に「こと」を用いると、「乗客の何人かの眼がトランクに一瞥を送った」が登場人物に意味ある事態として捉えられたというニュアンスが生じ、逆に、(21)に「の」を用いると、登場人物の認識行為における心理的動揺は伝わってこないものとなる。

次は「知る」の例である。

(22) 木谷がホテルに、遁げるようにして帰ったのは十一時ごろだった。……木谷は係りの

様子から、自分のいない間にだれも訪ねてこなかったのを知った。

(『告訴せず』：160)

- (23) 「……そうそう、平仙にいる小柳という外務員なァ、ヘラヘラと笑って調子のええ店員がおるが、ああいうのは気をつけんといけんよ。あの男もだいぶ客を殺してきたからなァ」

木谷は内心ぎくりとなった。老人が善意で忠告しているのか、小柳と取引していることを知ったうえでそう言っているのか、しばらく判断がつかなかった。

(『告訴せず』：166-167)

ここにおいても、「気づく」の(20)(21)の例と同じことがいえると思われる。まず、(22)の「の」の場合は、現場の事態の客観的な描写がふさわしいコンテキストと思われるが、(23)においては、老人が知っているかどうかについての木谷の心理的動揺が、語り手の声と重なり合い、「こと」に表れているということができよう。ここでも、語り手が、自らの心的態度で語っているのである。

次の二つの例は、先の(4)(5)の例の前後関係の状況が明示されたものである。このように、文脈を明らかにすることによって、(4)(5)のコンテキストから取り出された文だけをもってしては答えることができなかった問題、すなわち、なぜ、(4)では「の」がふさわしく、(5)では「こと」がふさわしいのかという問いに対する答えを見出すことができるといえよう。

- (24) 「……それよりも福山⁷さんの旅行は運がいいですよ。この前も二週間ほどの旅行の前に大儲けされたじゃないですか」

「うん。そうだったな」

お篠を連れて、北陸から京都へと遊び回ったのを、想い出した。

用談を済ませて帰る小柳に、

「外は今日も照りつけているのか？」

と木谷は訊いた。

「毎日カンカン照りです。……もう八月にはいったような暑さです」

そこまで言って小柳は気づき、

「いやな天気ですね。これで台風が北海道を直撃するという予報でも出ませんかね」

と笑った。

(『告訴せず』：175)

- (25) 環状7号線は空いていて、貨車のようなトラックが地響きを立てて追い抜いて行く。
「あと、ふた月もすると夏休みでマイカーの連中が地方に散るから、道路が楽になりますな」

老運転手は背中から客に呟いた。元子は銀行にいたころの暑中休暇に北海道にひとり旅していたことを想い出した。

恋人もできず、親しい仲間も居なかった。いつも一人で歩いた。行く先々で派手なグループやペアに出遇った。こちらはつましい一人旅。それに慣れてしまっ、べつに寂しいとも感じなかった。銀行の四角な白い壁の中に孤独で居ることの馴れが自分

の世界になっていた。

(『黒革の手帖 (下)』：237-238)

(24)は、語り手が、ひたすら、事態の進展をビデオカメラで記録するように、現場の状況を客観的に描写するのがふさわしいコンテキストであり、「の」が用いられている。一方、(25)は、登場人物の元子が「北海道にひとり旅していた」ことの思い出に感傷的にひたっているコンテキストであるが、語り手が客観的に描写することに収まりきれず、登場人物に感情移入を起し、この元子の感傷は、これを伝える語り手の感傷となって、つまり、語り手の心的態度となって表れ、「こと」が用いられているのである。

これまでの例は、「こと」が表す心的態度は、認識主体が認識対象から心理的動揺や感傷を引き起こされるといった、いわば受動的に心理的影響を受けるものであったが、認知動詞と共に用いられる「こと」は、すべてがそのような事例ばかりではない。次の例をみてみよう。

(8) お世辞でないことはその眼の色でわかった。

(『告訴せず』：308)

(26) 「久しぶりですね。今日は大阪ですか？」

長谷は笑顔で、まじまじと彼女を見ていた。

長谷は美奈子を知っている。伊予屋の奥さんと言ったから松山の洋品店の女房として知っていることが宗三に分かった。

(松本清張『内海の輪』：116)

(27) だが、警部補の興味は執拗であった。彼は山口教授の随筆で、ガラス釧が地元大学の発掘以前に宗三の手にはいっていたこと、しかし宗三はそれを山口教授以外にはだれにも、塚田、正岡講師にすら見せていないことが分かった⁸。

(『内海の輪』：214)

これらの例においては、登場人物が補文命題を意味ある内容として捉えて、いわば能動的に認識する心的プロセスがふさわしいコンテキストであるといえる。ここでも、この登場人物の心的プロセスに語り手が介入し、語り手自らの視点でもって語っているということができよう。

結局のところ、認識対象から受動的に心理的影響を受ける場合であれ、認識対象を能動的に意味あるものとして捉える場合であれ、語り手は、認識対象に心理的にコミットする、つまり心理的関与をもつという点では共通しているということができると思われる。

次に態度動詞の「恐れる」の例をみてみよう。

(28) 車がガレージにあるからには和子は家の中に居る。高柳秀夫がまだそこに残っているかどうかはわからない。和子がふいと窓を開けて外を見そうな気がした。姿を見られるのを恐れて、井川は家の前を急いで離れた。

(松本清張『彩り河 (上)』：25)

(29) それをしないのは、その「好意を持つ友人」たちも、他人に自分の顧客を奪われ、マーケットの一角が侵蝕されることを恐れるからである。

(『夜光の階段 (上)』：53)

(28)は、語り手が、私情を交えず、現場の事態の進行をそのままに描写するのがふさわしいコンテキストであるのに対し、(29)は、「好意を持つ友人」たちの考えを、語り手自身の意見の反映として述べるのがふさわしいコンテキストであるといえよう⁹。

4.2. N. McCawley(1978)の再考

ここで、先に述べた N.McCawley の例を検討してみよう。

(11) お父さんがお前のことをこんなに心配してやっている {の/? こと} がまだお前にはわからんのか?!

(12) 皆さんがたがお前のことをあんなに心配してくださっている {の/こと} がまだお前にはわからんのか?!

(N.McCawley 1978: 189-190)

本稿の観点からは、(11)で、「の」が好まれるのは、N.McCawley のいうように「お前のことをこんなに心配してやっている」のが真であるからなのではなく、単に事態そのものとして提示するのがふさわしいコンテキストであるからであり、逆に(12)で「こと」が自然なのは、「皆さんがたがお前のことをあんなに心配してくださっている」ことの設定に話者の主張が反映される、つまりその内容に心理的にコミットするのがふさわしいコンテキストであるからということになる。

次の例はどうだろうか。

(13) おにいちゃんから外人には日本語がとてもむずかしい {こと/*の} を 聞いて/聞かされて 驚いた。本当かしら?

(14) あなたがた西洋人にとって日本語がむずかしい {の/??こと} は当たり前の話です。

(N.McCawley 1978: 190)

まず、(14)では「の」がふさわしいのは、述語の「当たり前の話です」が、そもそも、その対象となる命題に何ら心理的関与をもち得ない場合について用いるのが普通だからである。一方、(13)で、「こと」が自然なのは、「本当かしら」が「日本語がむずかしい」の補文命題の真であることを示していないからではなく、補文命題の真偽性そのものを問題にする心的行為に、話し手の心的態度が表れるからなのである。

ちなみに、「驚く」が「こと」ではなく「の」をとっている例をみてみよう。

(30) 「ぼくはまた野見山さんがびっくりなさったのにおどろきましたよ。」

(『聖獣配列 (下)』: 107)

この場合、「おどろきました」の対象は、「野見山さんがびっくりなさった」という現場の事態そのものであり、「おどろきました」は現場での reaction を表していると考えられる。一方、(13)の「驚いた」は現場での reaction としての驚きを表したものである必要はない。この場合、驚いた対象である「こと」節は、現場の事態ではなく、概念として新たに捉え直されたものであって、よってこの場合の「驚いた」は現場での reaction そのものではなく、単に過去に生じた「驚いた」という事態を記述しただけに過ぎないということになる。つまり、(13)では、焦点は、「驚いた」対象の「こと」節の設定にあるのに対し、(30)は主節の「おどろきました」にあるのである¹⁰。

4.3. まとめ

よって、これまで考察してきた小説での認識動詞の場合における、「の」「こと」の使い分けについては次のようにまとめられると思われる。

(31) 語り手が、補文命題で表される事態に何ら意味づけを与えず、命題内容を現場に存在

する事態そのものとして捉える場合は、現場で指示しうる事態そのものを表す「の」が用いられるが、語り手が、補文命題を何らかの心理的関与をもって捉える場合は、語り手の心的態度が反映される「こと」が用いられる。

結局のところ、「の」と「こと」の使い分けは、コンテキストにおいて、登場人物、すなわち、語り手が、認識対象に心理的関与を引き起こすような意味内容を見出したかどうかということになるが、心理的に関与する際に、認識対象を現場に存在する事態としてではなく、認識者自らが、概念として捉え直す心的プロセスが必要となり、このプロセスが「概念化のプロセス」(山本1987:85)なのであると考えられる。

もっとも、語り手が認識対象に心理的にコミットするかどうかについては、客観的な基準が存在するわけではなく、あくまで、コンテキストにおける描写の主体である語り手の気分次第であるということになると思われる。とはいえ、少なくとも、「こと」が用いられるコンテキスト、つまり、語り手の心的態度が表れやすいコンテキストとは、認識対象が認識主体に心理的に影響を及ぼしうる情報を含んでいることからして、物語の進展において比較的重要な場面を含んでいる場合が多いと言うことは可能かもしれない。一方、「の」が用いられやすいコンテキストとは、もっぱら、事態の進展をそのまま追うのがふさわしいコンテキストということになる。この場合は、登場人物の認識行為も単なる事態の一部として扱われることになるう。

では、先の(1)の文「私は太郎が花子をぶつのを見た」が、「の」しかとれないのはなぜかといえ、補文命題が具体的動作を表すからなのではなく、「見る」といった知覚動詞は、その知覚対象を現場に存在する事態そのものとしてしか認識しえないという性質を持つ動詞であるためであり、一方、(2)の「太郎が10才であることは確かです」が「こと」しかとれないのは、「太郎が10才である」が抽象命題であるからではなく、この種の抽象命題は話し手がその命題の真偽値にコミットする判断文であり、よって、命題の真偽値にコミットするという心的プロセスにおいて、話し手の心的態度が表れる性質の文であるためということになる。つまり、「の」か「こと」の使い分けは、認識対象それ自体によってではなく、認識主体が対象をどのように捉えるかという認識主体の心的態度の有り様によって決まるということなのであり、従来の「の」と「こと」の使い分けの考察において欠けていたのは、この認識主体の心的態度の有り様という概念だったのである。

また、情報構造の点からいえば、「こと」構文においては、語り手の心的態度が表れる「こと」節の設定に焦点があり、「の」構文においては、現場の事態の認識行為を表す、主節のほうに焦点があるということができると思われる。

日本語の小説において、認識動詞の補文標識に「の」「こと」のどちらも表れるということは、語り手は、登場人物の認識行為については、客観的・中立的な描写に徹する場合もあれば、語り手が、語りの場面に自ら介入し、語り手自身の声でもって登場人物の認識行為を語る場合もあるということになると思われる¹¹。このことは、見方を変えれば、「の」が用いられているか、「こと」が用いられているかで、逆に、読者は、認識対象に対する語り手の心的態度のあり方を知ることができるということにもなると思われる。

5. コンテキストの現場が、発話の現場である場合の、「の」「こと」の使い分け

小説であっても、会話文においては現場時と発話時が重なり、よって、常に、心的態度を持つ「話し手」によって語られることになり、「こと」しか用いられないように思われるが、「の」「こと」の使い分けは当然のこととして存在する。それは、話し手が、補文の内容に意味づけを与えた場合は、「こと」が用いられ、補文内容に何ら意味づけを与えず、単に現場に存在する事態として捉える場合は、「の」が用いられるということである。

まず、次は「の」の場合である。

(32)「佐山君のほうでは、お前がここに乗っているのを知っているかな」

桑山はしばらくして訊いた。 (『夜光の階段(上)』：133)

(33)「あの記事で、豊島高子がエクス伯爵夫人にもぐりこんでいるのがわかっただけでもうれしかったんです。」 (松本清張『詩城の旅びと』：380)

次は、「こと」の例である。

(34)「あのねえ、五千万円ばかり、わたしが穴をあけてることが知れちゃったの」

(『夜光の階段(上)』：232)

(16)「なにしろ、そのときは無我夢中でしたから、なにもおぼえておりません。私より前に、幸子さんは誰かに殺されていたことは間違いありません」

(『夜光の階段(下)』：205)

「の」が用いられている(32)(33)は、「の」節の事態の客観的な記述がふさわしい例と思われるが、「こと」が用いられている(34)(16)の例は、「こと」節で述べられる内容の設定に話し手の主張がおかれるのが自然なコンテキストと思われる。もし、これらの例において、「の」が用いられると、補文命題の設定に焦点がなくなり、ポイントがずれた文になってこよう。

次は、述語の「確かだ」が会話文で用いられている場合であるが、コンテキストの違いが「の」と「こと」の違いを引き起こしていることが理解されよう。

(35)「次に、堀沢君が作並温泉で人を待っていたことです。誰を待っていたかわからないが、とにかく待ち合わせていたのは確かですね。……」(松本清張『山峡の章』：317)

(36)「それじゃ、あれは堀沢の演技だったのですか？」

「いいえ、演技とは思いません。ただ、そういうふうに向ける何かがあったことは確かだと思います。この点は、いちおう記憶していただいて、次に進みましょう……。」

(『山峡の章』：318)

6. 心的態度の表れとしての「こと」のいくつかの用法

これまでは、主に小説における認識動詞と共に用いられた補文標識の場合を中心に、「の」「こと」の使い分けを、「語り手」の心的態度が反映したものかどうかという観点から論じてきた。もっとも、「こと」については補文標識としての「こと」以外にも様々な用法があり、これらの用法についても、これまで多くのことが論じられてきた。しかし、これまで論じられてきた用法

であれ、論じられることのなかった用法であれ、「こと」の用法の中には、本稿での「心的態度の表れ」としての「こと」という観点から新たに捉え直すことが可能であると思われる用法がいくつかある。このことは、とりもなおさず、本稿での「こと」に対するアプローチの有効性を示すことになる。以下では、そのような例についていくつかみてみることにしたい。

6.1. 「こと」節に現れるモダリティ要素

「こと」節には、次のように、「だろう」「らしい」といった心的態度を表すモダリティを表す語が生じる場合がある。

(37) しかし、男は言った。

「おれは寝ない。君、先に寝ていなさい」

そうは言っても、自分もまたすぐベッドにはいるであろうことを、男は確実に知っていた。

(北杜夫「宵」『へそのない本』：159)

(38) ここでまた、市長が誰かと会う約束のあったらしいことを有島は思い出した。

(松本清張『犯罪の回送』：15)

(39) 浅井のこの考えがどうやら当たっているらしいことは、翌日の新聞にも、翌々日の新聞にも、いや、ずっとあとあとまで「県道を歩いていた男を車に便乗させた」記事が出ない事実であった。

(松本清張『聞かなかった場所』：174)

(40) 彼がのんびりした生活をしているらしいことは、数ヶ月に一度、思い出したように来る葉書で知ることができました。

(遠藤周作「スキャンダル」、益岡(2000：191)から引用)

もっとも、このような「だろう」「らしい」といったモダリティを表す要素が「～こと」の内部に現れる場合については、益岡(2000：89)は、「モダリティ性を失って命題内要素として働いているものとみなす」としているが、本稿でいうように、「こと」節に、話し手の心的態度が表れるとするならば、「だろう」や「らしい」をモダリティ表現として捉えることは可能となるかもしれない。また仮に、益岡のいうように、これらのモダリティ表現はそのモダリティ性を失っているとしたとしても、これらの表現はその命題に対する何らかの語り手の心理的コミットを表したものであると言うことはでき、よって、「こと」が用いられることになる」と説明されよう。

6.2. 「語り手」によってしか語られない場合

認知動詞や態度動詞の場合は、あくまで、対象を認識するコンテキストの現場に登場人物が存在し、この登場人物にオーバーラップする形で語り手が表れるが、物語の進行においては、「現場の語り手」ではなく、「語る主体としての語り手」、つまり心的態度を持つ語り手によってしか語られない場合がある。例えば、現場での事態の進行に解釈をさしはさんだり、コメントを加えたりすることができる立場にいるのは、物語のすべてを見渡せる立場にいる、「語る主体としての語り手」しかありえない。よって、このような場合は、「こと」が用いられるということになる¹²。

まず、次の例は、認知動詞「知る」が用いられている例であるが、「あとで」という語からわかるように、「こと」節の内容を認識することができる立場にいるのは、物語の進行をつかさどる語り手だけであるといえる。少なくとも、このような「こと」の用法を、補文命題の「抽象性」・「間接性」の概念だけでもって説明しようとするのは、この場合における「こと」の用法の本質を見失ってしまうことになるだろう。

(41) 「……この上流が作並温泉の先になっています」

青年団の人は挨拶のしようもないと思ってか、そんな説明をした。

しかし、(昌子は) その説明は、あとで意味があったことを知った。

(『山峡の章』：200)

次の例も、同じように考えられると思われる。

(42) 昌子は、しだいに喜久子に会いにきたことを後悔した。このような話を聞きにきたのではなかった。

(『山峡の章』：172)

(43) その小柳は、木谷に自分の説得が効いたことに満足し、うまそうに煙草を喫っていた。

(『告訴せず』：119)

(44) 川西は、いささか焦り気味になったが、心が浮き立ってきたことはかくせない。

「もう一本つけてくれ」

彼は妻に命令した。

(松本清張『地の骨 (上)』：241)

まず、(42)の「しだいに」という語を用いることができるのは、物語の進行を見渡す立場にいる語り手だけであり、(43)(44)についても、「木谷に自分の説得が効いた」「心が浮き立ってきた」というのは、語り手のコメントであり、「こと」が用いられるということになるだろう。

ここで、野田(1995a：427-428)があげた例を検討してみたい。

(45) 父は、庭の柿が実った {の/こと} を喜んだ。

(46) 父は、今までの苦労が実った {?の/こと} を喜んだ。

野田は、(45)のような「事態を見たままに捉える」場合は、「の」が用いられやすく、(46)のような「事態をひとつのまとまった事柄」として捉える場合は、「こと」が用いられやすい傾向があると指摘している。しかし、(46)で「こと」のほうがふさわしいことについては、「今まで」という語が関係していると思われる。つまり、「今まで」という表現は、語りの今の立場から過去を振り返って語ったものと考えられ、よって、現場の描写の視点を表す「の」よりは、心的態度を持つ語り手の視点を表す「こと」がよりふさわしいということになるだろう。

次の「こと」は、補文標識としての「こと」の用法ではないが、語り手の物語への介入を表しており、語り手の心的態度が表れている用法として捉えることは可能であると思われる。

(47) しかし、事態は、その二人が、帰ったことだけですまなかった。

昌子が二人を送り出した後、十分も経たないうちに、別の新聞記者がドアを叩いた。

(『山峡の章』：152)

(48) 「そのかたの勤めてらっしゃる先は、どうなのでしょう？」

夫が決して知らさなかったことだけに、無意識に熱心さになって表われた¹³。

6.3. 強調構文に現れる「こと」

「……のは、……ことだ」の強調構文があるが、強調する心的行為は、登場人物の心の有り様を知る立場にいる語り手によるものであり、強調される個所は語り手の心的態度が反映される「こと」で表されることになる。一方、「……のは」の「の」は、前提とされている事態そのものを表していると考えられ、これも、本稿での「の」の観点から捉えることができよう。

(49) ただ、解せないのは、夜帰ってきたときの夫の服に、かすかだが、香水の匂いが漂っていることだった。 (『夜光の階段(下)』：162)

(50) ただ一つ、気がかりなのは、長谷徹一と空港で会ったことだが、長谷は彼が美奈子といっしょだったことには気がついていない。 (『内海の輪』：144)

(51) 彼女の死体のある場所が関西地方にはいっているのは気のすまないことだった。 (『内海の輪』：163)

6.4. 「の」感嘆文と「こと」感嘆文¹⁴

感嘆文には、(52)(53)のような「なんて」ではじまる「の」感嘆文と、(54)(55)のような「どれほど」「何度」で始まる「こと」感嘆文がある。

(52) 母のシチューはなんておいしいんだろう。(感嘆) (庵 2001：245)

(53) このステーキはなんてやわらかいのだろう。(庵 2001：243)

(54) 母のシチューはどれほどおいしかったことか。(詠嘆) (庵 2001：245)

(55) この本が完成するまで原稿を何度書き直したことだろう。(庵 2001：244)

本稿での考え方に従えば、「の」感嘆文においては、「の」は感嘆の対象となる事態そのものを提示し、事態をそのまま述べることによって、対象に対する reaction ともいうべき感嘆という話者の感情を表す文である。一方、「こと」感嘆文においては、「こと」で述べられる内容は、現場に存在する事態そのものではなく、「何度」や「どれほど」といった表現が示すように、話し手の心的活動の反映として述べられたものである。このような内容は、話し手の心的態度を表す「こと」によってしか表されないと見える。よって、「こと」感嘆文は、「の」感嘆文のような、驚きが含まれた「感嘆」ではなく、「詠嘆」というべきである(庵2001：244)。

よって、感嘆の対象が事態そのものを表す「なんて」感嘆文は、「こと」をとることができず、逆に、感嘆の対象を心的活動の反映として述べる「どれほど」感嘆文は、「の」をとることができないということになる。

(56) *母のシチューはなんておいしいことだろう。

(57) *母のシチューはどれほどおいしかったのか。

6.5. 「のだろう」と「ことだろう」

まず、「のだろう」であるが、一般的には、この構文については、次のような、例と解説が与

えられるのが普通である（『日本語教育事典』：389-390）。

- (58) お祭りでもあるのだろう。人が大勢でている。

事実として、現れている事柄をもとにして、その背後にある原因・理由などを推量することを表す。

さて、本稿の観点からは、「だろう」によって推量される「の」が表す事態とは、あくまで、コンテキストの現場で存在するものとして捉えられた事態であるということである。

次の「のだろう」の例をみてみよう。

- (59) あれだ、と木谷は思った。あの歩き方の特徴で、お篠はそれが大場平助ではないかと疑ったのだ。たぶん平助は、その温泉旅館で、東京の住所も名前も架空にしたのだろう。
（『告訴せず』：417）

- (60) 「フィナンシャル・プレス」の記者というので先方は会ってくれるのだ。たぶん提灯記事でも期待しているのだろう。山越は肚の中で、ほくそ笑んだ。

（『彩り河（下）』：23）

- (61) 井川は断崖上へ至る山腹のジグザグな径を登った。年とった身体には辛かった。……断崖の真上に出るまで時間がかかった。

遂に登った。山越もこうして径を辿ってきたのだろう。（『彩り河（下）』：137）

これらの「の」節に共通していえることは、(58)の「の」と同じように、コンテキストにおける現場の事態を表しているということである。よって、「のだろう」は、コンテキストの現場の認識主体による推量ということになり、(59)は木谷、(60)は山越、(61)は井川という現場の登場人物による推量であり、ここに語り手の声は感じられない。

次は、「ことだろう」の用例である。

- (62) 雅子の夫はどうか。夫は、とうにこの女房に厭気がさしている。若くて、美しい愛人と早くいっしょになりたがっているにちがいない。相手の女もそれを熱望しているだろう。

夫は、女房が早く死ぬことを願っている。大きな体格の女房をみるにつけ、夫はそのたびに呪詛したことだろう。（『夜光の階段（下）』：11）

- (63) 大井芳太が選挙運動資金三千万円を運動員に持ち逃げされたという話は、代議士仲間には内密に知れ渡っていることだろう。大井は気の毒に警察に届け出ることもできず、検察庁に告訴もできず、泣き寝入りをしている。三千万円うまうまと取り得したのは、大井の選挙区の作州に住んでいた女房の姉婿だった。（『告訴せず』：417）

- (64) 井川は内心でそれは好都合だと思った。婦人用トイレの掃除を兼ねて、あいだあいだにそこへも入るなら、鏡の前で化粧を直しながらのホステスどうしのおしゃべりも聞けるにちがいない。客席から一時的に解放された彼女たちは、さぞ自由感に浸ることであろう。（『彩り河（下）』：260）

これらの例において、「こと」節を推量しているのは、道夫、木谷、井川という現場での登場人物であり、「のだろう」の推量と一見同じようにも思われるが、「だろう」で推量されているの

は、現場に存在する事態としてではなく、登場人物による推測という心的活動の結果として述べられているのであり、その心的プロセスには、心的態度をもつ語り手の視点が反映されており、登場人物と語り手の心的態度が一つになって表れているのである。これらの「ことだろう」における「こと」の用法は、先に述べた「こと」感嘆文につながるものと思われる。

実際、砂川他(1998:117)には、「ことだろう」について、次の例文と解説が載っている。

(65) ながいあいだ会っていないが、山田さんのこどもさんもさぞおおきくなったことだろう。

節に付いて、推測を表す。「だろう」だけでも言えるが、「ことだろう」は、よりあらたまった、書きことば的な表現であり、「いま・ここ」ではわからないことについて、感情移入しながら推測するときに使う。(65)のように副詞の「さぞ(かし)」とともに使うとさらに強い感情移入となる。

「さぞかし」が引き起こす「感情移入」とは、まさに、話し手(語り手)の心的態度の表れに他ならず、この場合、「の」は用いられない。要するに、「のだろう」「ことだろう」においても、「の」節の内容は、現場での存在する事態として提示されるのに対し、「こと」節の内容は、語り手(話し手)の推測という心的態度の表れとして提示されているということができ、これまで論じてきた「の」「こと」の観点から捉えることが可能であるということになる¹⁵。

6.6. 命令を表す対人的「のだ」と「ことだ」

野田(1997)では、命令を表す「のだ」と「ことだ」の違いが論じられている。まず、次の例をみてみよう。

(66) 「……悪いことは言わないから、ちゃんとした病院で検査を受けることだ。できたらCTスキャンを撮ってもらいなさい。(後略)」

野田(1997:228)は、この例の「忠告」の「ことだ」について、「聞き手が悪い状況にとどまらないため、陥らないためには、その行為を実行することが必要、重要だという話し手の判断を表している」とし、この場合、次の(67)のように、「のだ」を用いることもできるが、「ことだ」のような、忠告のニュアンスはなくなるとしている。

(67) ちゃんとした病院で検査を受けるんだ。

また、野田(1995b:259)では、次の例について、「ノダは、コトダに比べると命令形に近い性質をもつ」と述べている。

(68) (騒いでいる子供に向かって)

こら、静かにする {*ことだ/んだ}。

なぜ、このような違いが生じるかについて野田は述べていないが、本稿の観点からは、「こと」が忠告の意味を持ちうるのは、「こと」での内容が話者の意向によって取り立てられた命題であり、よって、そこから、話者の提案や、忠告といったニュアンスがでてくると説明できよう。一方、「のだ」に命令の意味合いがあるのは、「の」で表される内容がすでに存在する指示性のある事態を表すためであり、そこから、その実現を強制する一方的な有無を言わさぬ命令のニュアン

スがでてくるといえることができると思われる。

7. おわりに

補文標識の「の」「こと」が、それぞれ、「具体的な出来事」「直接的」、「抽象的な概念」「間接的」を表すとする、久野や Josephs の見解は、「の」「こと」についてのある程度の本質を捉えていたことも確かであり、そのためもあってか、それ以後の研究においても、このような観点からの捉え方の影響はきわめて大きなものがあったといえる。しかし、「の」「こと」がどちらも可能なコンテキストにおいて、どちらが用いられるのかという問題については、「具体的」「直接的」であれば「の」が用いられ、「抽象的」「間接的」であれば「こと」が用いられるとする説は、十分納得のいくものとはいえず、この点においては、久野や Josephs の考え方に代わる、新たなアプローチでの説明方法が求められていたといえる。

本稿は、主に小説における認識動詞の場合における、「の」「こと」の使い分けについて論じてきたが、「の」「こと」の使い分けは、補文命題に「語り手」（話し手）の心的態度が反映されているか否かによる、とする本稿での説は、これまで問題とされてきた「の」「こと」どちらか一方しか用いられない場合のみならず、「の」「こと」どちらも可能な場合の使い分けをも説明することができ、より「の」「こと」の本質に近づくことができたといえることができる¹⁶。

また、従来、補文標識「こと」との関連において扱われることのなかった、物語の進行をつかさどる語り手としての「こと」の用法や、「の」感嘆文と「こと」感嘆文、「のだろう」と「ことだろう」、対人的「のだ」と「ことだ」といった用法における、「の」「こと」の対比的用法についても、本稿での「の」「こと」の捉え方と関連付けて説明することができた。もっとも、このような「こと」の用法についての捉え方は更なる検討の余地があることはいうまでもない。しかし、「こと」を「抽象性」「間接性」として捉える従来の見方では、これらの「こと」の用法との関連性をつかむことはむずかしく、両者の「こと」の用法に見出される関連性の指摘は、本稿でのアプローチの方向性を支持することになると思われる。

注

- 1 山本(1987:81)も、次の(i)の例を引き合いに出して、この場合の補文命題「浴場の内側から、ガラス戸の錠に仕掛けがしてあった」は「こと」が用いられているが、「具体的に認知可能な事態ではないだろうか」として、補文命題の具象性・抽象性に基づく、「の」「こと」の使い分けについては疑問を呈している。
(i) 花村さん、浴場の内側から、ガラス戸の錠に仕掛けがしてあったことを思い出して下さい。
- 2 原文はローマ字で、例文番号も変えてある。N.McCawley の例についても同様である。
- 3 この井上の見解に対し、安藤(1986:87)は、久野の説を支持し、「私見では、(9)において、「具体的な動作」を念頭に置いている場合は、「ノ」を用い、「抽象的な概念」を念頭においている場合は「こと」を用いると説明される。…… (10)においても、「ノ」を使った場合は、話し手は幸福の訪れるのを鮮やかなイメージとして脳裡に描いていることが分かるし、一方、

「コト」を使った場合は、そういうイメージは消えて、概念のみが残るのが感じられる」と井上の見方に異議を唱えている。

しかし、この安藤の見解に対しては、まず、(9)については、「誰かが部屋に入って来た」を、「具体的な動作」を表す場合と「抽象的な概念」を表す場合にはっきり区別することが、はたして、可能であるのかという疑問があり、(10)の説明については、本稿で論じるように、具体的イメージ、抽象的イメージは、それぞれ、「の」と「こと」によってもたらされるものであり、その逆ではないことを認めたものとみなすこともでき、結果的には、安藤の見解は、その意図とは逆に、久野の説の問題点を示したものと解されよう。

- 4 ただ、認識主体が、補文命題をどのようにみなすかによって、(17)で「こと」が用いられ、(18)で「の」が用いられることも十分あり得る。

また、砂川(1988:20)の「「～こと」の句はそれが含まれる文全体の話し手が体験した出来事を、自らの中で対象化し、概念的に再構成した内容を表すものであると言える」とする見解は、ほぼ山本の見解と同じものと考えられる。ただ、砂川(1988)では、もっぱら、「こと」が「と」との対比で論じられており、「の」についてはふれられていない。

また、次のメイナード(1997:256)の「こと」についての見解も、「こと」についての本質を捉えたものと思われる。

例えば、名詞述語文では、まさに「こと」化するという言語操作の主としての主体の視点が暗示されるのである。「こと」化とは、言語主体が語り手として出来事全体をある距離から見つめ、それをひとつの状況的概念と察知する姿勢を意味している。「こと」化するとは、出来事をそのまま現象文的に捉えるのではなく、全体を包括するある概念として見直すことなのである。

ただ、本稿で問題にしたいのは、ある出来事を、現象文的に捉えるのと、主体の視点でもって捉える場合の違いは、一体、何によるのかということである。

- 5 澤田(1980:30)は、形式名詞「の」について、「形式名詞「の」は指示性をもつ。「の」の指し得る領域は、具体物(人、物、etc.)から、抽象物(状態、様子、光景、etc.)まで広がり得る」とする仮説を提案しているが、この仮説は「の」の本質を捉えたものと思われる。本稿も、「の」については、この見解に従うものとする。
- 6 この分類は、工藤(1985:48)による。
- 7 「福山」は「木谷」の偽名である。
- 8 この例においては、「こと」補文の中に取り立て詞の「すら」が生じていることは注目していいかもしれない。「すら」は語り手の心的態度を表すと考えられる。
- 9 これは、語り手でなく、より正確には、登場人物の「道夫」の推測を表している。
- 10 「…のに驚いた」と「…ことに驚いた」は、本稿での6.4節でのべる、「の」感嘆文と「こと」感嘆文に平行する面があるといえよう。

また、牧野(1996:130)で論じられている次の文をみてみよう。

(i) 私は言語文化化学的なことを考える {の/? こと} が大好きなんです。

本稿の観点からは、この文で、「の」が好まれるのは、「大好きなんです」が、現場での対象に対する reaction を表しており、reaction を引き起こす対象は、現場の事態を表す「の」で表されることになると説明されよう。

- 11 日本語の小説の特色として、文末の「ル」と「タ」の交代はよく指摘されるところであるが、語りの主体が示されているかどうかの観点からすれば、「ル」と「の」、「タ」と「こと」は、

それぞれ、似たような役割を担っているといえるかもしれない。もっとも、「ル」「タ」の交代は文末に生じる現象であるが、「の」「こと」の交代は、補文に生じる現象であるという点で、「の」「こと」の交代のほうが、登場人物のより内面にくいこんだ「語り手」の態度表明といえるかもしれない。

- 12 益岡(1997：第2章「名詞節におけるコトとノ」)は、「こと」と「の」の交替について論じたものであるが、「コトがノに代わらない場合」として以下のような例をあげている。

(i) 外国で生活したことが彼女を変えた。

(ii) 久身子の兄の啓一が無事ハンブルグでの任期を終え、八月末に帰国して久身子の結婚式に参列できたことも、母親の澄代を一段と喜ばせた。(「十年の後」)

益岡は、これらの例については、「表現者が認定済みの事態を客観的な観点から叙述する場合である。この場合のコトは「事実」という語の意味に近いものであり、文のタイプとしては「客観的説明文」とでも呼ぶべき内容のものである」(益岡1997：19)としているが、ここでいう「表現者」を、事態・事実の因果関係に語り手が自らの解釈・意向を反映させる「心的態度をもった語り手」として解することは可能であると思われる。そうすると、これらの事例を本節での「心的態度をもった語り手によってしか語られない場合」とみなすことも可能になるう。

ちなみに、益岡が、「ノがコトに代わらない場合」としてあげている例は、以下のような例である。

(iii) 何気ない調子で出て行くのへ、一座の者がそれとない視線を送った。(「中央流沙」)

(iv) 直介が砂場から帰ってきたのをきっかけに、修一は席を立った。(「十年の後」)

益岡は、これらの例については、「当該事態を、それを認知する主体が当該時点で経験する事態として描写する場合であって、文のタイプで言えば、「主観的描写文」とでも呼ぶべき内容の場合である」(益岡1997：22)としているが、これは、語り手がひたすら事態をビデオカメラで記録するように、中立的な描写の立場に徹する場合であり、「認知する主体が当該時点で経験する」とは、本稿での現場(の登場人物)の視点で描くということに他ならない。つまり、「主観」という語の定義を、「語り手の心的態度の表出」とすれば、益岡のいう「客観的説明文」は本稿では「主観的説明文」となり、一方益岡のいう「主観的描写文」には語り手の心的態度は反映されていないので、本稿では「客観的描写文」ということになる。そもそも、一般的には、「説明」とは主観的なものであり、「描写」とは客観的なものであるといえるかもしれない。

- 13 (47)(48)の例においては、「こと」が取り立て詞の「だけ」と共起していることは、注目していいかもしれない。

- 14 メイナード(2000：174-176)では、「コト」感嘆文と「ノ」感嘆文についてふれられているが、この2種類の感嘆文の違いについてはふれられていない。「こと」や「の」によって概念化する過程で、……」(メイナード2000：176)という記述があるが、「概念化」が含まれるのは、「こと」感嘆文の場合だけであるとするべきだろう。

- 15 「のだろう」「ことだろう」の用法解説については森田・松木(1989)が詳しく、「ことだろう」の「こと」が何を意味するかについては靱山(1995)の論考があるが、本節の「のだろう」「ことだろう」の分析対象は、小説においては誰の視点から述べられたものかということのみを問題にしたきわめて狭いものであって、森田・松木(1989)や靱山(1995)の論考におけるように「のだろう」「ことだろう」のすべての用法を対象にした網羅的なものではないことをお断りし

ておきたい。

ちなみに、杵山(1995:119-120)は次の(i)(ii)について「文末のコトダロウにおけるコトは、(ダロウだけの場合よりも)〈確信度を弱め、控えめな態度を表す〉」としている。

(i) Aさんは今頃故郷で楽しんでいるダロウ。

(ii) Aさんは今頃故郷で楽しんでいるコトダロウ。

また、この問題については澤田(1980:31)にも言及がある。

(iii) (外は)雪が降っているのだろう。

(iv) (ふるさとは)雪が降っていることだろう。

澤田は(iii)の「の」は「判断根拠となるべき、ある「状況」を「指し」ている」のに対し、(iv)については「話者は、判断の具体的根拠を直接に観察していない。「こと」は、命題内容と話者の心的距離を拡大する働きをし、この文を、より「空想的」に響かせる。(iii)を「現場的」とすれば、(iv)は、「非現場的」ということになるだろう」としている。

杵山の「確信度を弱め、控えめな態度を表す」であれ、澤田の「より「空想的」に響かせる」であれ、これらのニュアンスは、話し手が「こと」節での命題内容に心理的にコミットすることから生じる「話者の概念化」の心的プロセスを経た「こと」が、「だろう」と共に用いられることから生じるニュアンスとも考えられよう。もっとも、このことについては、更なる検討を要する。

- 16 本稿では、検討する余裕がないが、近年では、鎌田(1998)の研究が注目に値すると思われる。本稿においても、「の」「こと」の使い分けは、主に認識動詞の場合についてであったが、鎌田の従来との研究の違いは、「コトができる・コトにする・コトがある」といったコト専用文をも、射程に入れていることである。鎌田は、これらコト専用文の内容節の特徴を、「主語の現われない非時制節で、意味も時間軸上の事象ではなく、事象の概念的な意味を表す(鎌田1998:4)」としている。これは、現場の事態としては存在しえないということであり、よって、「の」は用いられず、結局は、あくまで、これらの内容節は、話し手の設定という観点でしか捉えられないということになり、よって、「こと」しか用いられないとする本稿の分析と一致することになる。その他の点での鎌田の分析と、本稿の分析の関連については、他日を期したい。しかし、鎌田の研究においても、「の」「こと」どちらも可能な場合の使い分けについては、ふれられていない。

参考文献

- 安藤貞雄(1986)『英語の論理・日本語の論理』大修館書店
庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
井上和子(1976)『変形文法と日本語(上)』大修館書店
大島資生(1996)「補文構造にあらわれる「こと」と「の」について」『東京大学留学生センター紀要』6, 47-69
影山太郎(1977)「いわゆる日本語の「名詞句補文辞」について」『英語教育』1月号, 66-70, 大修館書店
鎌田倫子(1998)「内容節をとる動詞のコトとノの選択規則—主動詞の意味分類と節の時制から—」『日本語教育』98:1-12
工藤真由美(1985)「ノ、コトの使い分けと動詞の種類」『国文学 解釈と鑑賞』50-3:45-52

- 久野暲 (1973) 『日本文法研究』 大修館書店
- 近藤泰弘 (1997) 「の」「こと」による名詞節の性質—能格性の観点から— 『国語学』 190, 132-142 (近藤泰弘 (2000) 『日本語記述文法の理論』 (ひつじ書房) 297-312に再録)
- 佐治圭三 (1993) 「の」の本質—「こと」「もの」との対比から— 『日本語学』 10月号, 4-14, 明治書院
- 澤田治美 (1980) 「日本語「認識」構文の構造と意味」 『言語研究』 78, 1-35
- 砂川有里子 (1988) 「引用文における場の二重性について」 『日本語学』 9月号, 14-29, 明治書院
- 砂川有里子他 (1998) 『日本語文型辞典』 くろしお出版
- 坪本篤朗 (1984) 「文の中に文を埋めるときコトとノはどこが違うのか」 『国文学 解釈と教材の研究』 29-6: 87-92
- 日本語教育学会編 (1982) 『日本語教育事典』 大修館書店
- 野田春美 (1995a) 「ノとコト—埋め込み節をつくる代表的な形式—」 宮島達夫・仁田義雄 (編) 『日本語類義表現の文法 (下) 複文・連文編』 419-428, くろしお出版
- (1995b) 「モノダとコトダとノダ—名詞性の助動詞の当為的な用法—」 宮島達夫・仁田義雄 (編) 『日本語類義表現の文法 (上) 単文編』 253-262, くろしお出版
- (1997) 『「の (だ)」の機能』 くろしお出版
- 橋本修 (1990) 「補文標識「の」「こと」の分布に関わる意味規則」 『国語学』 163, 1-12
- (1994) 「「の」補文の統語的・意味的性質」 『文藝言語研究・言語篇 (筑波大学文芸・言語学系)』 25, 153-166
- (2001) 「補文標識「の」の統一的解釈をめぐる問題点」 中右実教授還暦記念論文集編集委員会 (編) 『意味と形のインターフェイス 中右実教授還暦記念論文集 (上)』 487-497, くろしお出版
- 牧野成一 (1980) 『くりかえしの文法—日・英語比較対照—』 大修館書店
- (1996) 『ウチとソトの言語文化—文法を文化で切る—』 アルク
- 益岡隆志 (1997) 『複文』 くろしお出版
- (2000) 『日本語文法の諸相』 くろしお出版
- メイナード, 泉子・K (1997) 『談話分析の可能性—理論・方法・日本語の表現性—』 くろしお出版
- (2000) 『情意の言語学—「場交渉論」と日本語表現のパトス—』 くろしお出版
- 榎山洋介 (1995) 「文末の「～コトダロウ」における「コト」の意味分析—「ダロウ」に「コト」が付くことによる意味の変容—」 名古屋・ことばのつどい編集委員会編 『日本語論究 4』 115-132, 和泉書院
- 森田良行・松本正恵 (1989) 『日本語表現文型 用例中心・複合辞の意味と用法』 アルク
- 山本英一 (1987) 「認識の様態と補文標識」 小泉保教授還暦記念論文集編集委員会 (編) 『言語学の視界 小泉保教授還暦記念論文集』 73-89, 大学書林
- Banfield, Ann (1973) Narrative style and the grammar of direct and indirect speech. *Foundations of Language* 10, 1-39.
- Josephs, Lewis S. (1976) Complementation. *Syntax and Semantics* 5. *Japanese Generative Grammar*, 307-369. New York: Academic Press.
- McCawley, Noriko A. (1978) Another look at *no*, *koto*, and *to*: Epistemology and com-

plementizer choice in Japanese. In: John Hinds and Irwin Howard(eds.) *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, 178-212. Tokyo: Kaitakusha.

用例出典

松本清張 『告訴せず』	文春文庫	1978
松本清張 『彩り河（上）』	文春文庫	1986
松本清張 『彩り河（下）』	文春文庫	1986
松本清張 『詩城の旅びと』	文春文庫	1992
松本清張 『内海の輪』	角川文庫	1974
松本清張 『聞かなかった場所』	角川文庫	1975
松本清張 『山峡の章』	角川文庫	1976
松本清張 『地の骨（上）』	新潮文庫	1975
松本清張 『黒革の手帖（下）』	新潮文庫	1983
松本清張 『夜光の階段（上）』	新潮文庫	1985
松本清張 『夜光の階段（下）』	新潮文庫	1985
松本清張 『聖獣配列（上）』	新潮文庫	1988
松本清張 『聖獣配列（下）』	新潮文庫	1988
松本清張 『犯罪の回送』	新潮文庫	1993
北 杜夫 『へそのない本』	新潮文庫	1976

付記 お二人の査読委員の方には数々の的確なご指摘を賜り、修正の際には大いに役立った。もっとも、そのすべてに答えることができたかどうかについては心許ないところではあるが、ここに記して感謝の念を申し上げたい。

（投稿受理日：2003年11月9日）

（改稿受理日：2004年2月19日）

尾野 治彦（おの はるひこ）

北海道武蔵女子短期大学教授

001-0022 札幌市北区北22条西13丁目

ZAG00300@nifty.ne.jp

On the factors that govern the selection of *no* and *koto* in novels:

From the viewpoint of the narrator's mental attitude

ONO Haruhiko

Hokkaido Musashi Women's Junior College

Keywords

no, *koto*, the process of conceptualization, narrator's mental attitude,
psychological commitment

Abstract

Beginning with Kuno (1973), there have been many discussions about the difference between the meaning of *no* and *koto*. Most of these discussions have been concerned with what *no* or *koto* means, based on sentences taken out of the context, not within the context of a passage. What I would like to discuss in this paper is what factors will make us choose one form, not the other in a context where both forms are possible. This seems to be a question that has not been seriously discussed so far.

What we need to answer this question is the cognitive and pragmatic viewpoint. We have shown in this paper, using examples from novels, that the selection of *no* or *koto* depends on narrator's mental attitude. *Koto* is used when the narrator's mental attitude is reflected in the complement sentences, and *no* is used when it is not. In other words, *koto* reflects the narrator's psychological commitment to the complement sentences.

This explains the following *koto* usages that have not been taken into consideration thus far. Some of which are illustrated in the following examples.

- *Koto* used with complement sentences that include modal auxiliaries like *darō*, *rashii*
- *Koto* used with exclamatory sentences
- *Koto* used in *kotodarō*, *kotoda*

It should be noted that these sentences used with *koto* express the speaker's intention. As a consequence, it follows that they tend to coincide with not with *no*, but *koto* which is a reflection of the speaker's mental attitude.